長谷寺かわら版
百日紅＋1
2020（令和2）年
1月1日

衲衣新調

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年もよろしくお願いします。

お知らせしましたように、「百日紅」は、100号（19年正月号）で一旦筆を擱きました。

28年の歴史を刻みましたが、たくさんのカンパや切手が寄せられました。

印刷費や送料などの経費として役立てるのが、寄せて下さった読者さんたちのお気持ちだったのでしょうが、そんなものには寺の経費を充てればいいわけで、もっと意味のあることに使いたいと思い、預金通帳を作りました。

現金はそのまま預金し、いただいた切手は寺の事務に使って、同額をやはりカンパとして預けました。

大法会や涅槃会のイベントなどで、使いきってしまったこともありましたが、また貯まりました。「塵も積もれば・・」で、かなりまとまった額になったので、一気に使ってしまうことにしました。

ちょうど、長く使い続けた衲衣が傷み、これまで修繕を重ねて、だましだまし使ってきましたが、そろそろ後進に席を譲るべきときと判断し、これを新調することにしました。

というわけで本号は、「百日紅」臨時増刊の「＋1」。カンパや切手を寄せてくださった方々へのお礼の号であり、数字のない決算報告でもあります。

☆袈裟の話

衲衣の話に入る前に、袈裟の話をしておかなければいけませんね。衲衣は数ある袈裟のひとつに過ぎません。袈裟はいうまでもなく、僧侶が身にまとうものです。

ところで、僧侶になるためには、出家をするわけですが、出家は「家出」に他なりません。家を出て、家族も財産も、何もかも捨てて修行生活に入ります。飾りに過ぎない頭髪も捨てます。

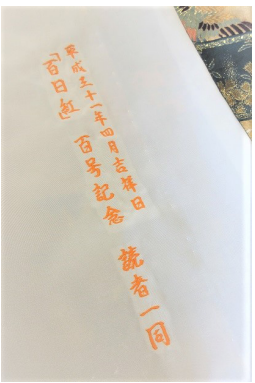
何もかも捨てたのですから、着るものさえありません。裸で暮らすしかないわけです。

しかし、そういうわけにもいかないので、使い古した襤褸布を縫い合わせた衣だけを身にまといます。これが袈裟で、いわば襤褸布のパッチワークです。だから袈裟には、糞掃衣という別名があります。糞を掃除するような布で拵えた衣というわけです。

袈裟はインド語のカシャーヤが語源とされています。「赤褐色」と訳されることが多いですが、「醤油で煮染めたような色」をイメージしてもらった方が近いです。そういう薄汚れた色の衣なんですね。

次頁の写真はもっともベーシックな袈裟で、如法衣と呼ばれます。「法（教え）のままの衣」という意味です。

写真では分かりにくいか



裏にはこういう刺繍

もしれませんが、一枚の布でできているわけではありません。幾枚かの布を縫い合わせた体裁をしています。パッチワークですね。

縦に7本のスジ（條）があり、それぞれが3枚の布で構成されています。これで3×7＝21枚。

この如法衣は21枚の布を縫い合わせてあるわけですが、多いものになると125枚という袈裟もあります。

一枚の布でできているわけではありませんが、広げると単なる紐付きの長方形の衣です。これを身体に巻いて、紐でとめるだけと、いたってシンプル。

袈裟には様々な種類がありますが、すべてこの如法衣のバリエーションです。

☆西陣織

衲衣は、いささか派手な、儀式用の袈裟です。葬式や大法会のおりに着けます。

ときおり訪ねてくれる京都の法衣屋の営業さんと相談をして生地を決め、発注しました。半年後、西陣織の衲衣が見事に縫い上げられて、届きました。仕立てるだけで半年かかったわけです。

その営業さんから、西陣の機織りの見学に来ませんかと誘われたので、お言葉に甘えて上洛しました。

見学して分かりました。いかに手間と情熱をかけて作られたものか、きちんと見ておいてもらいたかったのでしょう。

案内されたのは、西陣の手機織りの作業現場です。

昭和初期にでもタイムスリップしたかと思うような陋屋の作業場。2台の手機が置かれ、父親と息子さんが黙々と機を織っています。

京都の西陣といえば、名高い高級絹織物の産地です。しかし、絢爛豪華な絹織物だからといって、ゴージャスな場から生まれるはずもありません

織りあげられる布の豪華さと、制作現場とのギャップにたじろぎました。

☆納衣

届いた袈裟は、いかにもって感じの桐の箱に納められています。箱書きもご覧の通り。書かれているのはこの衲衣の本名です。

書いてくれたのは、営業さんが「書き屋」と呼ぶ、その道のプロらしいです。

で、名前です。

納戸色金紗撫子唐花縁條地金綴紗雲海極楽鳥台中衲衣

長いですね。なんと24文字もあります。袈裟のパーツの色や柄、布地などの情報が盛り込まれています。

直訳すれば、「縁條（縁取り）の生地には納戸色の金紗に撫子唐花の模様、台中（本体部分）は金綴紗に雲海と極楽鳥の模様をあしらった衲衣」てなところでしょうか。

せっかく新調したのですが、しばらく寝かせて熟成させておき、秋の大法会で初めて着けました。これからは、葬式などでもお目にとまる機会があろうかと思います。興味のある方は、どうぞぐっと近づいてご覧ください。

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088 - 686 - 2450
ﾌｧｸｽ 088 - 686 - 2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/